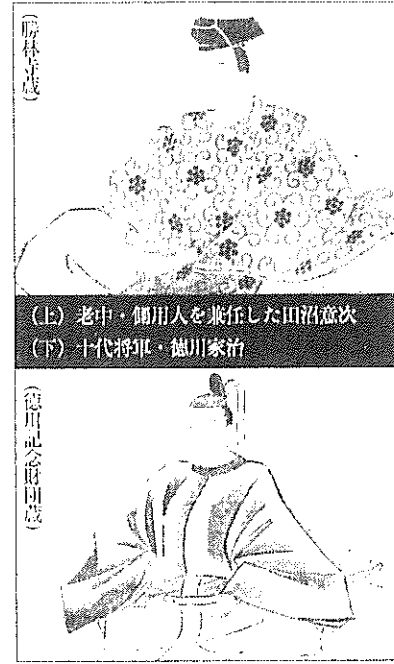


# 將軍の世紀

やまうち まさゆき  
山内昌之  
武蔵野大学特任教授・  
東京大学名誉教授

【第二九回】田沼意次の「めでたい御代」

十代家治の時代は「田沼時代」と呼ばれる。時期区分で姓を使われる例外的幕閣が残した足跡とは。



(上) 老中・御用人を兼任した田沼意次  
(下) 十代将軍・徳川家治

(徳川記念館蔵)

一、田沼時代とは何か

武芸はなまけずに心がけ、家来たちにも油断なく申し付け、若者はとりわけ精を出すように心がけさせ、他見も差し支えない。(武) 芸者は折に触れ見物もさせ、時には自らも見物すべきだ。かつまた武芸を心掛けたうえは、その余力で遊芸することは自分の思いのままであり、止めだてするには及ばない。ただし、けしからぬ芸をしてならぬことは言うまでもない。

原文・武芸懈怠なく心掛け、家中の者どもも油断なく申し付け、若きものどもも八別して精をいだし候様二心掛させ他見苦しからず、芸者折々見聞いたさせ、間々二八自身も見物これあるべく候、かつまた武芸心掛け候うえ、余力を以て遊芸いたし候儀は勝手次第、差しとめる二及ばず候こと。ただし不埒なる芸ハいたさせまじきこと勿論二候事。

この文章は、十代將軍家治の側用人で老中を務めた田沼意次の遺訓である(『相良町史』資料編近世一、七〇)。これは武家の遺言めいた文章にしては奇妙であるが、田沼家中の統制不足や田沼時代の性格を解くカギが図らずも秘められている。「芸者」(Gueka) は今のように「芸能の心得のある者」だけでなく「能力のある者」も意味

した(『邦訳日葡辞書』)。武芸者もそこに含まれる。意次の心性ではもともと武芸を生業とする武士が本職をなおざりにしない限り、太平の世に活きる糧として「遊芸」するのも御奉公の糧や気散じになるという考えだったのである。延享二年(一七四五)に出した亡父意行の遺作和歌集の序文でも、父が「弓矢とるかたへに、和歌のみちにも心よせて」と序文を寄せている(『相良町史』六八)。

田沼時代は、二つの異なる性格と方向性を内部にはらんでいた。早くも戦前に辻善之助は、田沼時代を一面で「混沌濁乱の時代」としながら、他方で「新氣運の勃興せんとする時代」で「新文明の光の閃きを認める時代」と性格づけていた(『田沼時代』)。吉宗と大岡忠相の死に伴う田沼時代の到来は、江戸大都會の成長ぶりと相まって、武士が支えた雅文壇の担い手が俗文壇にも関わることで、戯作という新しい俗文芸を發達させた。その代表は幕府御家人の大田南畝(四方赤良こと蜀山人)である。天明狂歌の南畝が、あこがれの「痴者」になって親しく交際したのは、勘定組頭の土山宗次郎孝之である。

やがて意次の蝦夷地探検とその開拓構想に関わる旗本であった。土山は意次失脚後に死罪となった田沼派であるが、田沼時代の天明都市文化は、雅俗両面にわたって土山や南畝のような旗本・御家人、それに大名やその家

臣という武家に支えられていたといえよう(中野三敏『十八世紀の江戸文芸』)。黄表紙作家の恋川春町は駿河小島藩江戸留守居、朋誠堂宮三二は秋田藩江戸留守居であり、狂歌には南畝の他に唐衣福淵(田安家家臣)や朱楽菅江(幕府先手与力)などの幕臣もいた。田沼意次の「余力を以て遊芸いたし候儀は勝手次第」という遺訓は、自らの下で栄えた都市文化に自信を持っていたからではないか。南畝の天明狂歌は江戸中心に繁榮する天下泰平の御代を寿ぎ、手放しの「めでた尽し」で当代を賞美した(『揖斐高』江戸の文人サロン)。

「めでたい御代」は、雅俗に通じた下級幕臣・南畝に象徴されるように、家柄や身分に関係ない環境で、人材が伸び伸びと新たな思想や芸術文化を發達させた時代であった。近世の日本人がのびやかでゆったり空気を吸った田沼時代を「(山師)の時代」と呼ぶのは、藤田覚氏である(『田沼時代』『田沼意次』)。「蘭学(蘭東)事始」や『解体新書』で知られる杉田玄白は、「世にあふは、道楽ものにおこりもの、ころび芸者に山師運上」と世相を風刺した(『後見草』、『燕石十種』第二所収)。また、田沼政治を批判的に眺めた『田沼主殿頭殿へ被仰渡書』という雑本は、吉宗が取り寄せた「ハルシヤ馬」を年々産み育てた牧場で樹木を賄賂金銀で伐りとり、日陰が薄くなっ

# 文藝春秋

大正十二年一月三十日第三種郵便物認可  
令和二年五月一日発行(毎月一回一日発行)  
第九十八巻第五号(四月十日発行)

総力  
特集

## コロナ戦争

日本の英知で疫病に打ち克つ  
塩野七生/磯田道史/橋下 徹  
小池百合子/吉村洋文 ほか

追悼 志村けん「永遠のコメディアン」/五輪延期費用IOCも負担せよ 五月号

